

派遣者番号	R4K20	氏名	中里 奈穂
研究主題 —副主題—	インクルーシブ教育システム構築に向けた学級全体への支援の効果及びその活用に関する研究		
派遣先大学	東京学芸大学 教職大学院	指導担当者	村山 拓
所属	北区立東十条小学校	所属長	齊藤 浩雄

キーワード： インクルーシブ教育 通常の学級 学級全体への支援 多層指導モデルMIM
コグトレ®： 認知機能強化トレーニング

要旨： 文部科学省（2022）「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」によると、学習面又は行動面で困難を示すとされた小・中学校の児童・生徒の割合は増加傾向にあり、インクルーシブ教育システム構築において通常の学級が果たすべき役割や機能の重要性が伺える。そこで、通常の学級における学級全体への支援の効果と活用の可能性を明らかにすることを本研究の目的とした。先行研究の検討を通して、通常の学級における支援の機能に関する研究の動向を整理するとともに、都内公立小学校第1学年の実践を基に、児童へのアンケート調査と教員へのインタビュー調査を実施した。その結果、支援を通じた児童理解や効果的な補充指導が行われたことや、日常的・継続的な支援が有効であることなどの回答が得られ、通常の学級で学級全体への支援を行うことは、様々なニーズをもつ児童生徒の早期発見と困難の緩和を可能とすることが示唆された。

インクルーシブ教育システム構築に向けた学級全体への支援の効果 及びその活用に関する研究

中里 奈穂

1 問題の所在と目的

10年ぶりの実施となった文部科学省（2022年12月公表）「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童・生徒に関する調査結果」によると、学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた小・中学校の児童・生徒の割合は8.8%（推定値）で、前回の調査結果6.5%（推定値）を上回った。特別支援教育に関する理解や認識が高まる中、これに該当する子供以外にも、通常の学級には、特別な教育的支援を必要とする子供がいる可能性が指摘されている。東京都教育委員会「特別支援教室の運営ガイドライン」では、初めて特別支援教室の退室に向けた考え方（退室の目安）が示され、「特別支援教室の指導を終了することは、児童生徒が必要とする特別な教育的支援が一切なくなるということではなく、在籍学級における支援へと移行することである。」と述べられている。しかし、学校現場では、「支援の移行」に対して不安や困難さを訴える声も聞かれる。そこで—先行研究では、現在の特別支援教育を巡る状況と、論文や各自治体の取り組みから「発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童・生徒を含めた学級全体への支援」について整理する。それら先行研究を踏まえ、東京都公立小学校での実践について検討し、学級全体への支援の効果及びその活用を明らかにすることが本研究の目的である。

2 研究の方法

(ア) 先行研究

①日本の義務教育段階の多様な学びの場の連続性と、東京都の特別支援教室並びに東京都教育委員会（2021）「特別支援教室の運営ガイドライン」で示した支援レベルについて取り上げ、現在の特別支援教育を巡る状況を整理した。

②インクルーシブ教育システム構築における通常の学級の役割や機能に関する研究の動向を明らかにするため、文献調査と文部科学省発達障害早期支援研究事業の調査を行った。

(イ) 東京都公立小学校での実践についての調査

学級全体の支援として、第1学年各学級（3学級）で「多層指導モデルMIM」と「コグトレ®：認知機能強化トレーニング」に取り組んだ。結果の数値の変化、児童へのアンケート調査、教員へのインタビュー調査を元に、支援の効果と活用について検討した。

3 結果と考察

(ア) 先行研究

①特別支援教育へのニーズの高まりを受け、通常の学級の担任が、在籍する児童生徒一人一人の読み書きの特性をはじめとする多様な子供一人一人の特性について把握し、指導方法の工夫等により、通常学級の中で児童生徒が抱えている困難さへの対応をしていくことが求められていることが分かった。通常の学級の役割や機能がより増していることが伺える。

②文献調査から、学級全体に関わる支援について述べている文献は41件抽出された。また、文献調査で抽出された支援（表1）と同じものが、文部科学省発達障害早期支援研究事業の各受託機関の成果報告書からも抽出された。また、新たに抽出された支援もあった（表2）。特別支援教室で行われている支援を通常の学級でも行い、その効果や有用性を検証する実践が見られた。また、抽出された多くの支援が、多層指導の形態を取っていることも分かった。

表1 文献調査から抽出された学級全体への支援

学級全体への支援		総数
教科学習		23
授業のユニバーサルデザイン（以下 授業UD）		11
学びのユニバーサルデザイン（Universal Design of Learning:以下 UDL）		7
教育的介入に対する反応 (Response to Intervention/ Instruction:以下 RTI) モデル	カリキュラムに基づく尺度 (curriculum-based Measurement 以下 CBM)	(2)
	多層指導モデル (Multilayer Instruction Model 以下 MIM)	(2)
構成的グループエンカウンター（Structured Group Encounter:以下 SGE）		2
クラスワイド・ソーシャルスキル・トレーニング (Class-wide Social Skill Training 以下 CSST)		2

表2 文部科学省発達障害早期支援研究事業の調査から抽出された学級全体への支援

学級全体に関わる支援	H26	H27	H28	計
一斉授業の改善	11	9	7	27
UD	23	30	14	67
SST	3	3	1	7
RTI	1	2	1	4
MIM、鳥取大学方式、読み書きアセスメント	10	14	8	32
SPBS	0	0	2	2
SGE	0	1	0	1
「アセスメント」	5	3	1	9
ピアジョイントレーニング	0	2	1	3
「学びの土台作り」	3	2	1	6

(イ)東京都公立小学校での実践についての調査

①「多層指導モデル MIM」についての結果と考察（検討Ⅰ）

約 94%の児童が、12 月時点でのスコアが増加しており、アセスメント MIM-PM の正解率が大幅に上昇した児童が多かったことが分かる。また、児童のアンケート調査からは、多層指導モデル MIM の学習課題が易しいと感じる児童は 1/3 弱にとどまったことが分かった。教師へのインタビュー調査（半構造化面接法）からは、表 1 のような回答が得られた。

表 3 担任教師の回答（抜粋）：MIM

質問項目	担任教師の回答(抜粋)
①学級の児童の様子	・学級に特別な支援を要する児童は、全体の 2 割弱はいるという認識である。 ・先述の「支援レベル2」の児童も多く、学級担任 1 人では対応しきれないと感じている。
②支援の効果	・特殊音節は、大変つまずきやすいポイントで、授業で学んですぐ身につくものではないというのが共通の認識。 ・日常的な指導だけでは、なかなか正しく書けるようにならず、定期的なトレーニングすることは効果がある。 ・【3rd ステージ】の指導が充実しなければ、大きな効果は得られない。
③支援を通しての児童理解	・動作化をすることで、今まで見落としがちだった「静かに困っている児童」を早期発見し、早期対応ができ、取りこぼさずに学級の児童一人一人のアセスメントができる。
④支援を通してわかったことの活用	・効果的な指導につながった。 ・特殊音節を記号化・動作化して「見える化」することで、よりわかりやすく指導することができた。 ・学級の児童一人一人の理解度を把握することができ、効果的な補充ができた。
⑤支援を継続的に進めていくためのポイント	・全教職員への「多層指導モデル MIM」に対する共通理解の促進と校内支援体制の構築が重要である。 ・年間指導計画作成も継続的に進めていくためには、欠かせない。 ・年間計画でどのような位置づけをしていくのかについても話し合っていくことが必要である。 ・「多層指導モデル MIM」もデジタル版を活用してみたい。

②「コグトレ®：認知機能強化トレーニング」についての結果と考察（検討Ⅱ）

児童アンケート調査を見ると、『「覚える」は簡単だった。』『「教える」は難しかった。』等、児童それぞれに得意なものと不得意なものがあることが分かった。また、教師へのインタビュー調査（半構造化面接法）からは、表 2 のような回答が得られた。

表 4 担任教師の回答（抜粋）：コグトレ®

質問項目	担任教師の回答(抜粋)
①支援の効果	・学習というよりもゲーム感覚で取り組むことができ、児童が意欲的に取り組む様子が見られた。 ・5 種類のトレーニングがあることで、飽きることがなく、難しい課題にもあきらめずに挑戦する姿が見られた。 ・普段の授業では間違ふことに抵抗がある児童も、間違ふことに、それほど抵抗感を示さなかった。 ・具体的にどうすればよいか伝わりにくい指示について、具体的な作業として経験させることができる。
②支援を通しての児童理解	・児童の一人一人の強みや弱みを知ることができた。 ・教師が児童理解を深めるだけでなく、児童自身も自分の強みや弱みを知る機会となった。
③支援を通してわかったことの活用	・学習の土台となる力についての客観的なアセスメントとして活用できそうだ。 ・保護者との面談の際の資料として、活用できた。
④支援を継続的に進めていくためのポイント	・「コグトレ®：認知機能強化トレーニング」の効果測定をどのように行うかを検討することが重要である。 ・全教職員への「コグトレ®：認知機能強化トレーニング」に対する共通理解の促進と校内支援体制の構築。 ・年間指導計画作成も必要であるが、学級の実態に合わせて5種類のトレーニングについて、軽重をつけられる自由度も必要である。 ・学習の土台となる力の育成と考えられるため、教科としての扱いは難しい。 ・週に何回、1 回にどのくらいの時間設定で行うのが効果的であるのか、さらに検証していく必要がある。

4 研究の成果と課題

学級全体への支援は、東京都教育委員会「特別支援教室の運営ガイドライン」で示された支援レベル 1～3 のどの段階の児童にも、ある一定の効果が見られることが分かった。学級全体で取り組むことで、児童一人一人のアセスメントとして活用することができ、教員は児童理解を深めることができるとともに、その児童に適した指導の在り方を考える手掛かりとすることができる。通常の学級で学級全体への支援を行うことは、多様な学びの場の連続性の保証につながり、様々なニーズをもつ児童生徒の早期発見と困難の緩和を可能とすることが示唆された。しかし、1 校・1 学年の実践についての調査であるため、他校・他学年についても検証していくことが求められる。また、教育課程上でどのように扱うのか、カリキュラム・マネジメントの視点から考察し、学校での指導体制の構築についてさらに検討していく必要がある。